

8. 六極真空球

大正 11 年 (1922) 11 月から翌 12 年 9 月までの僅か一年足らずの間ですが、東京発明研究所内ラジオ社から発行された「ラヂオ」という月刊誌がありました。1922 年といえば、RCA が UV 199, 201 A を発売した年です。当時黎明期にあった無線通信技術を平易に解説することが編輯方針で、表紙のタイトルも本邦唯一通俗無線雑誌ラヂオとなっています。

当然その内容は鉱石ラジオや三極管を使った発振器、受信機が主体ですが、その中において大正 12 年 5 月号に『六極真空球の紹介』という記事がありまして、この雑誌の発行元であるラジオ社の社長濱地常康氏の出願 (特願 10047 号) の内容が紹介されています。下図をご覧頂けばその云わんとする処は自ずと明らかで、このロマン溢れる発明に論評を加える事は本意ではありませんが、実際に作って実験されたものか否かは甚だ疑問に思われます。

参考までに以下説明文の一部を転載させていただきます。

硝子管 (イ) の (ル) 部分を著しく細くして空洞 (ツ) を造り、空洞 (ツ) を小にしてその内部にフィラメントを入れる。管の他端にプレート及びグリッド (ヘ) (ホ) を入れるが、別に小孔 (ル) の開口部に金属板 (ハ) (ニ) を相對峙せしめ、各々管外に導線する。今此管を使用して第二圖の様に配線する。回路中に變壓器 (カ) (ヨ) を入れその兩端を (ハ) (ニ) の兩板に接続する。この回路内に振動を発生せしむると、その振動電圧は變壓器 (カ) (ヨ) を通じて (ハ) (ニ) 板間を充電する。つまり (ハ) (ニ) 板が一種の蓄電器を構成するから變壓器を通じて振動エネルギーはこの兩板間に充電さるゝのである。然るにこの蓄電は (ロ) より (ヘ) に流るゝ電子流を遮り (ロ) (ホ) 間の電子流の止まる結果、變壓器 (カ) (ヨ) の動作も鈍止するから (ハ) (ニ) 間の蓄電は (ヨ) を通じて放電し再び原状の振動状態に復歸する。斯様に持続的な制御操作が繰り返される。本真空球は通常の三極真空球の場合に於けるプレート電壓降下に依る起振動と相俟って最も完全に振動を起生するのである。

圖 二 第

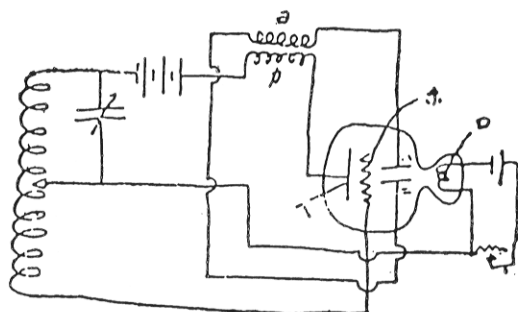


圖 一 第

